二〇〇二年度国文学会彙報

二〇〇二年度国文学会活動状況

〈新入生歓迎会〉　二〇〇二年四月六日　五時三〇分～　新島会館

〈国文学会総会・研究発表会〉　二〇〇二年六月三〇日　寧静館会議室

・総会

・研究発表

石川淳初期作品『瓜喰ひの僧正』
——石川淳と芥川龍之介——　西垣　尚子（奈良女子大学大学院博士課程後期課程）

音声言語（聞くこと・話すこと）に焦点を当てた開発的授業の試み　川島　範明（滋賀県立安曇川高等学校教諭）

・講演

韓日の語り物の比較研究
——説経節『山椒太夫』を中心に——　向井　芳樹（本学教授）

〈講演会〉

二〇〇二年一月二三日（木）　寧静館会議室　院生部会主催

・安部晴明享受史　田中　貴子（京都精華大学助教授）

〈同志社国文学〉

第五七号　二〇〇二年一二月二五日発行

第五八号　——向井芳樹教授退職記念号——　二〇〇三年三月二〇日発行

〈国文学会会報〉　第二九号　二〇〇三年三月二〇日発行

二〇〇二年度修士論文題目

『万葉集』における敬語の一考察
——中臣宅守の敬語歌群の位置づけについて——　田野　順也

明和改正謡本の研究
——『伊勢物語』と能の関わりをめぐって——　橋場　有香

狂言「蚊相撲」試論　小谷　祐介

三島由紀夫「施餓鬼舟」論
——「小説」と民俗学——　柳川　朋美

吉行淳之介　娼婦小説論
——「原色の街」「驟雨」「娼婦の部屋」の差異について——　春木　眞巳

現代日本語における特定表現の特徴　東　健太郎

現代日本語における形容語彙の意味分野と語種
——実際の使用における——　亀田　美紀

『今昔物語集』における動詞句について　松村美緒
貿易用語の語構成の一側面
——意味関係と語種を中心に——　林林

二〇〇二年度卒業論文題目

憶良の中にある「公」と「私」
——「哀世間難住歌」を中心に——　石原和歌子
明日香皇女「殯宮之時」の挽歌の考察　村上拓郎
『出雲国風土記』における「所造天下大神大穴持命」について　野崎華子
大伴坂上郎女と藤原麻呂の相聞歌について　小野田誉子
『万葉集』における「秋風」の歌について
——大伴家持が「秋風」において達成したもの——　恒石華子
「見る」ことの意味
——挽歌における用法——　植田久美子
山上憶良の対句表現
——長歌を中心に——　山本直子
『日本霊異記』における転生と償い
——上巻第十縁を対象として——　赤星梓
百鬼夜行説話考　江原忠志
『今昔物語集』大江定基出家考　藤原里子
『今昔物語集』における箸墓伝承　肥田紗織
『今昔物語集』源博雅考
——巻二十四・二十四を中心に——　今山愛子
『今昔物語集』における河原院の怪異説話　安井有香
『宇治拾遺物語』第六〇話　進命婦考　金澤文美
『宇治拾遺物語』「夢買ふ人の事」の夢
——その売買をめぐって——　川合かおり
『宇治拾遺物語』巻七ノ一「五色鹿ノ事」の考察
——類話との比較——　小坂守
『今昔物語集』「染殿后」
——説話の編纂意図——　黒澤麻衣子
『宇治拾遺物語』「博打聟入事」
——昔話との比較を巡って——　中谷真悠
『宇治拾遺物語』第九六話の編纂意図　成恵華
『源氏物語』女三の宮の父恋い
——「幼さ」と父娘関係の関わり——　西原志保
『宇治拾遺物語』第八四話「世尊寺に死人掘出す事」に関する一考察　大畑奈都
朱雀門の鬼
——『長谷雄草紙』諸概念に関する一考察——　佐々木我夢
『今昔物語集』葦苅説話考　上西藍

『宇治拾遺物語』第一四ノ一〇話登場人物考
——権力者と陰陽師の関係についての考察——　江崎美名
謡曲『俊成忠度』の独自性と存在意義　藤原みどり
平家物語における重衡像　廣野理恵
英雄としてみる武蔵坊弁慶　印塚茂登樹
御湯殿日記の基礎的考察
——成立、執筆者、執筆方法、文学性について——　北上真生
平家物語剣巻の安倍晴明
——晴明登場の意図——　小佐々裕美
太平記生成史と作者像
——本文改稿の跡と研究史を手がかりに——　西林剛志
建礼門院徳子
——その女性像との関わり——　小浜晶子
『徒然草』にみる兼好の女性観　杉井恵美
徒然草第六〇段の考察
——盛親僧都における仏教と徳——　高塚美緒
仁勢物語のパロディ性について　田中麻衣
『御曹子島渡』と江の島弁才天　吉田桂子
沢木耕太郎論
——沢木耕太郎に見るノンフィクション——　小橋川唯之
七夕説話について　松田香織

町田康の表現における擬音語、擬態語
——『きれぎれ』『土間の四十八滝』の場合——　奥村美紀
寺山修司論「言葉」について　澤田匡史
『曽根崎心中』が漢劇『曽根崎殉情』になるまで　石田順子
在原業平伝説について
——伊勢物語と歌の特徴をもとに——　飯室雅子
『新版歌祭文』成立考
——『卅三年忌袂白絞』を中心に——　南畝薫
『鉢かづき』における表現の特質
——水に関する用語を中心に——　尾崎日香里
『竹斎』における主人公の役割と構成
——古活字本と製版本を比較して——　貞本圭代
『本朝二十不孝』における創作意図　酒井公子
黙阿弥歌舞伎における悲劇とその方法
——登場人物と作劇法をもとに——　坂井恭子
『南総里見八犬伝』における浜路の運命
——信乃との関係から——　坂本祥子
「牡丹灯記」受容作品の方法
——浅井了意『伽婢子』を中心に——　佐藤桃子
歌舞伎における夢の演出
——『傾城鎌倉山』を中心に——　竹内真喜子
蕪村俳句における色彩　丹吾礼

『源氏物語』と『田舎源氏』
――「趣向」への転換――　山本妹弓

能における「場」と物狂の能について
――賀茂を中心に――　山田幸子

『近代能楽集』の「熊野」にみる三島の観念　金津千紘

「細雪」
――三姉妹の光彩と陰翳――　藤井章子

「舞姫」試論
――「白」と「黒」そして「灰色」に至る経緯――　濱田真由美

「抒情歌」論
――川端康成を社会学から分析――　日野元裕

坂口安吾「木々の精、谷の精」における虚と実
――その狭間にある「ふるさと」――　平井雄樹

理想と現実が融合して生まれる横溝正史の独特の世界とは
――初期作品「悪魔の手鞠唄」から――　堀江里奈

中島敦の会話文　石田哲生

村上春樹論――現代社会構造と闘う「新しい物語」の創造
――『アンダーグラウンド』とその後――　小牧慶子

観光小説としての「古都」
――川端康成の見つめた昭和三十六年代の京都――　上月温子

室生犀星「市井鬼もの」
――その始点をめぐって――　前田剛

『餓狼伝』論
――人物の魅力――　牧谷良太

『死海のほとり』論
――同伴者イエスと弱さの認識――　元好朝子

坂口安吾「桜の森の満開の下」を舞台・映画という表現の中で平行して見ていくことで、「孤独」について考察する　野田万利子

宮本輝「祈り」の文学へ
――『幻の光』から『錦繡』、死生観の変化をとおして――　大野憲司

映画『田園に死す』におけるアイデンティティーの追求　進藤雄介

二人のアキが綾なす「生と死」の宿命の物語
――宮本輝「錦繡」論――　神農織江

真保裕一作品が支持される五つの要素についての研究　園田真一郎

中島敦『悟浄歎異』『悟浄出世』論
――「狼疾」及び「蚘」的自己からの脱却――　杉岡歩美

「浮雲」の作中人物と林芙美子　高城香也子

「春は馬車に乗つて」論
――病妻物における虚構と現実――　田中重人

太宰治の女性観
——母性を求めて——　谷口典江

石川淳『普賢』論
——「普賢利生記の図柄」描出と「文章の美」の描出——　渡邊俊

治癒への願い
中島敦『弟子』とその周辺　矢木智子

『HUMANLOST』研究における方法論
この暴力に溢れた世界に堕されて
——「暴力」への思索としての『神の子どもたちはみな踊る』——　吉田真理子　青木太郎　則武聡

村上春樹とアメリカ
——世界の一部への再生——　宗恵理子

吉行淳之介が描きつづけた「男」
リアリズム文学としての「樹下の家族」
——その文学的位置の考察——　田島康裕　千葉雄太

「少女」町子と装置としての「屋根裏部屋」
——尾崎翠「第七官界彷徨」「歩行」の二作品より——　深津千晶

遠藤周作『海と毒薬』『悲しみの歌』の相違から見えること　橋本浩一

少女世界への希求
——太宰治「女生徒」論——　堀和日

新しいカニバリズム
——間接的食人と直接的食人——　堀正之介

遠藤周作研究
——『わたしが・捨てた・女』を中心に　嵜紀美江

石川淳『普賢』論
——昭和モダニズム文化から——　岩瀬茂樹

沈黙し続けた神
虚構の現象学
——渋沢龍彦『唐草物語』の読書行為論的分析——　松永桂子　水川敬章

「限りなく透明に近いブルー」における会話のカギカッコの有無について
——その使用法と効果——　中川恵里

『ノルウェイの森』手記の果たす役割
——過去の再構成による新たな現実——　奥野真工

窃視の文学
——松本清張「張込み」に見られる境界侵犯の現象——　太田匡彦

破壊と創造の使者
——「フリーク」及び「道化」考——　齋藤園実

『死霊』における「他者」　坂本慎也

筒井康隆とメタフィクション　笹川雅史
小林秀雄と文芸批評　海野崇
「氷点」の作為性を探る　島添ひとみ
黒岩涙香の翻案小説「死美人」と「片手美人」——原作のボアゴベとの比較を中心に——　篠田淳子
「歌は言葉の芸術です」から「新訳源氏物語」へ——与謝野晶子小論——　塩嵜弘子
Media Networkのなかの転向　瀧本健作
野坂昭如・エロティシズム・一九六〇年代　丹野佳樹
幸田文と「境界」——方法としてのルポルタージュ——　伊藤祐輔
吉行淳之介『目玉』と可笑し味　分島由美子
「たけくらべ」の子どもと遊び　村上裕美
周辺の文学——浅井和枝から千刈あがたへ——　中島里恵
機能動詞とその周辺——実例を通して——　石田裕子
漢字三字の語についての考察——梶井基次郎の感覚——　前田奈美
文学から捉える色彩——『注文の多い料理店』における「あお」——　杉本沙知香

発達遅延児における言語の一特徴　福井久美
明治期の文学作品に見る外来語　五反田ゆずか
『今昔物語集』における霊鬼の意味するもの　後藤多美子
『今昔物語集』における夢について——本朝部の夢をめぐって——　池田久美子
古代歌謡の語彙　宮下学
新聞における読点の使用状態　三田村麻美
狂言台本における対称代名詞の改変——宗家と別家の相違と近世口語の影響——　小野貴久
田辺聖子の表現——小説における方言のおもしろさ——　大本さつ恵
北村薫と加納朋子の文体論的作品研究　鈴木統太郎
小林秀雄と感動体験——「当麻」と「無常といふ事」を通して——　武田千春
両親への呼称の使用実態——世代差・男女差・両親の性別差・場面差に注目して——　植田美紀
絵本の語彙研究——幼児の言語発達をめぐって——　福間梓子
メール文章における言語使用——方言意識の観点から——　安斉真司
焼酎銘柄考　乙藤武彰